

ハイデッガーのいくつかの対話篇について——意志、放下、中動態

國分功一郎（東京工業大学）

要旨

ハイデッガーはいくつかの対話篇をものしている。それらの対話篇は形式においても内容においても意志の概念を疑問に付すものとなっている。ハイデッガーの形而上学批判が意志批判とつながっていることを考えると、これらの対話篇は彼の思想的プログラムの中で重要な位置を占めるものと考えられる。ハイデッガーは「形而上学のことば」からの脱却を志向していたが、対話篇はまさしくその実践として捉えられるからである。

対話篇の中でもひときわ目立つ「アンキバシエー」では、「放下 Gelassenheit」というキーワードが提示される。この語はハイデッガーの思想、特にその「意志の形而上学」に対する批判において重要な役割を果たすはずだが、この対話篇以外ではほとんど論じられていない。それは「放下」そのものが論考において論じられることを拒むからではないだろうか。

ハイデッガーによる、形而上学のことば、あるいは意志の形而上学のことばに対する批判は的確である。ただそこからの脱出が「放下」のような語によってなされねばならないのかどうかは疑問が残る。古代の言語が有していた中動態を参照すると、能動と受動や主体と客体といったハイデッガーが批判したカテゴリーを相対化することができる。言い換えれば、中動態を参照することで、ハイデッガーが明らかにしようとしていた我々の言語の問題点をより明確に表現することができる。